

G I L B E R T O

G I L

ジルベルト・ジル

1990 JAPAN TOUR

G I L B E R T O

G I L



■1990年全国公演日程■

- 7月23日(月) 18:30 昭和女子大学人見記念講堂
24日(火) 18:30 中野サンプラザホール
26日(木) 18:30 サンシティ越谷市民ホール
27日(金) 18:30 市川市文化会館
30日(月) 18:30 北海道厚生年金会館
8月2日(木) 18:30 愛知厚生年金会館
4日(土) 18:30 石川厚生年金会館
6日(月) 18:30 大阪厚生年金会館
7日(火) 18:30 川崎教育文化会館
9日(木) 18:30 松山市民会館
10日(金) 19:00 福岡市民会館

主催■財団法人民主音楽協会 読売新聞社

名古屋公演は共催・中部読売新聞社

大阪、松山公演は共催・読売新聞大阪本社、読売テレビ放送（大阪公演のみ）

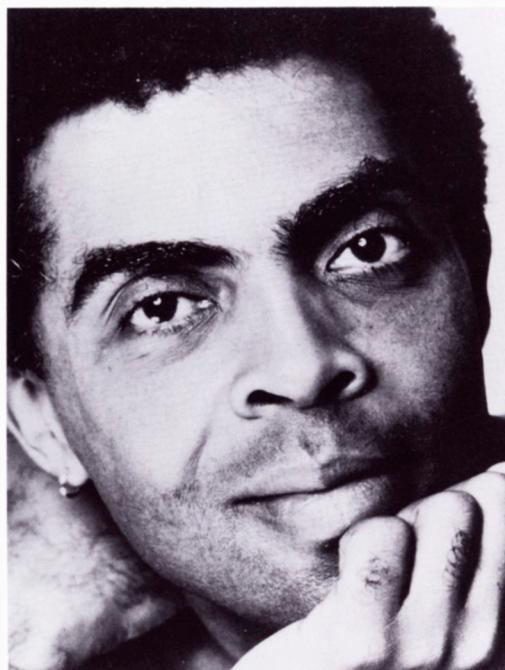
福岡公演は共催・読売新聞西部本社

後援■外務省 文化庁 ブラジル大使館 J-WAVE

協力■月刊ラティーナ WEA MUSIC

協賛■サッポロビール株式会社

MENSAGEM



このたび、アフロ＝ブラジル音楽の巨星「ジルベルト・ジル」の再招聘が実現し、全国10都市で公演を行うことになりました。

衆知の通りジルベルト・ジルは、ブラジルを代表するポピュラー・ミュージックの偉大なリーダーであるばかりでなく、その本拠地「バイーア」から、世界中の様々な音楽シーンに“熱波”を送り続けているスーパースターです。

現在、パリ、ニューヨーク等を発信源とする「ワールド・ミュージック」が、音楽世界的一大潮流になっておりますが、そのいくつかはジルとバイアをルーツとしています。

今回の公演は6月にヨーロッパからスタートした「ワールド・ツアー」の一環であり、彼の熱いメッセージがこめられた最新の音楽にご期待ください。本公演の開催にご協力くださいました関係各位に、心より感謝申し上げるとともに、本公演の成功が、日本とブラジルの更なる相互理解に、多少なりとも貢献できることを念願する次第でございます。

財団法人民主音楽協会
読売新聞社

民主音楽協会は、ブラジルのポピュラー・ミュージックを日本で伝統的に紹介していますが、本年も引き続きブラジルで最も名高い音楽家の一人であるジルベルト・ジルを日本に再度招聘することになりました。

シンガー・ソングライターとして国際的にも名声を博しているジルベルト・ジルは、芸術と芸術家に対し感性豊かな日本のファンの皆様に、ブラジルの大衆とその生活に深く根ざした彼の芸術がもつ、ブラジルの香り漂うメッセージを再び伝えてくれるものと期待します。

日本でブラジル文化の尚一層の普及のためにこの企画をされた主催者に対し、心からの祝意を表す次第であります。

東京にて、1990年7月5日

パウロ・セルジオ・トラバリ・ボージー
臨時代理大使

Dando continuidade às suas já tradicionais apresentações da música popular brasileira no Japão, a "Min-On Concert Association" nos traz novamente este ano um dos mais notáveis músicos brasileiros: Gilberto Gil.

Cantor, compositor e letrista internacionalmente aclamado, Gilberto Gil saberá transmitir uma vez mais à platéia japonesa, reconhecidamente sensível às artes e aos artistas, a mensagem de brasiliadade contida em sua arte de tão profundas raízes nos costumes e na gente do Brasil.

E, pois, com grande satisfação que me congratulo com os organizadores de mais esta promoção da cultura brasileira neste país.

Paulo Sérgio Traballi Bozzi
Encarregado de Negócios, a.i.

Tóquio, 5 de julho de 1990.

私達は、4年ぶりに再び日本の風土、人々、特異な伝統、超近代的な文化産業、そして外来文化・芸術に対するみなさんの熱心さに触れるために戻ってきました。

また、4年前に“日の出づる国”日本で抱いた、温かな素晴らしい想い出を新たにする機会を持つことができました。

今回の日本公演においてもまた楽しく、温かな出会いに巡り合えることを願っています。……夢を録画できるようなカメラを日本が創って欲しいな（ジルの最新曲『日本』の歌詞より）……もうすでに店頭に並んでいれば最高ですが！

ジルベルト・ジル

Após quatro anos voltamos ao Japão para um novo encontro com a terra, a gente, a extraordinária tradição, a moderníssima cultura industrial e o extremo interesse artístico da nação pelo que vem de fora.

Após quatro anos temos, de novo, a oportunidade de renovar as preciosíssimas lembranças que tão carinhosamente guardamos da terra do sol nascente.

Que seja alegre e caloroso este novo encontro....do Japão quero uma câmara de filmar sonhos....tomara que já esteja a venda nas melhores lojas do ramo!

Gilberto Gil



ブラジル・ポピュラー音楽界の永遠のリーダー、ジルベルト・ジル

国安 真奈

ブラジルでは日本のように活字媒体が発達していないので、ことに音楽に関する限り、主な情報源はテレビにラジオ、それに新聞だ。新聞には毎日、イベントやコンサート、レコード評やインタビューなどを掲載したぶつあつい「二部」版が挟まっている、ちょうど日本のP誌やC誌のような役割を担っている。テレビは、時にブラジル・アーティストの特番を組み、彼らの最新の動向を絵入りで伝える。そしてラジオは、一日中音楽を流し、新聞やテレビといった大型媒体からはみ出すような小さな情報を、最もリアルタイムに提供する媒体だ。

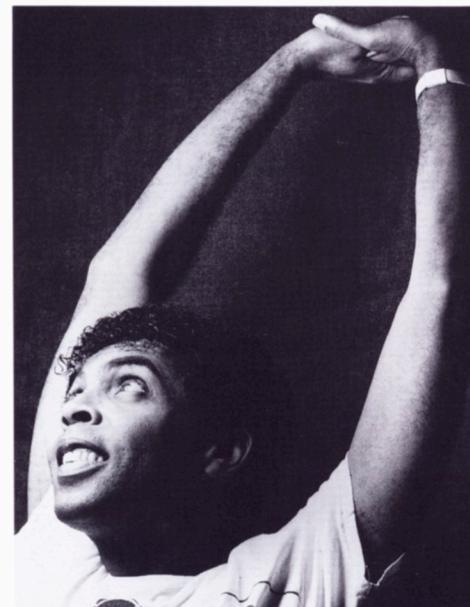
実際人々は、一日中ラジオをつけ放しにしてお気に入りの放送局を聞いている。家の中はもちろん、レストランで職場で、通勤の車の中で、はたまたトイレでバスルームで、人々はラジオをつけ放しにしているのだ。

ラジオの醍醐味は、「どこそこのレコード店では、何々のアルバムを今日限り値下げ！」だの、「どこそこの場所では、何々のイベントが開催され、ひょっとすると誰それが参加するかも？」だのいう、極めてローカルな情報が得られる他に、「ある日突然新曲が流れ始めた！」という、いつも新鮮なオドロキを感じられるところにある。日本ではとても考えられないことだが、情報というものが、どれも確固たる信憑性に欠ける彼の地では、新聞の書くアルバム発売の予告ですら、人々は余り信用しない。そこで、ラジオで流れて初めて、「おっ、新曲だ！ アルバム出たんだ！」ということになるのだ。

新曲のオドロキの中でも、特に毎回強烈なインパクトを提供してくれるアーティストがジルベルト・ジルである。最初に耳にしたジルの作品は、アルバム『レファゼンダ』からのものだったが、タイトル曲「レファゼンダ」にしても、軽快な「エラ」にしても、そのハーモニーの特異性と異質なリズム、さらにはジュゲムジュゲムの呪文のような歌詞の世界に触れて、ブラジルという国の秘密の一端を嗅ぎつけたかのような気持ちがしたものだ。次に登場したのは『優しき野蛮人たち』というアルバム。何やらトロピカルズモとかいうものが、若者の青春を代弁している部分があるらしい。それにしても、『レファゼンダ』の世界は、このバイア4人組の世界と、一体どう関わりを持っているのだろう。ブラジルでは、ビートルズ・ジェネレーションはこんなふうに消化されているのか。こいつは傑作だ、というのが当時の未熟な感想。『レファヴェーラ』の頃には、ジルベルト・ジルというアーティストについて、さらに知るようになっていたが、「イレー・アイエー」なる曲が登場

するに到って、これは一日本人が持つ「世界に関する常識」の外側にある「何か」だと気付き、「バイア・阿拉バーラ」では、その「何か」が海を隔てたアフリカに関係しているものなどと知った。自身のルーツをアフリカに認めることが誇らしさ。バイアをアフリカと結び付けることの自然さ。人種や文化の差別が公然とは行なわれないブラジルでは、カラードの人々はアメリカほどアイデンティティーにこだわらないのかと誤解していたのだが、とんでもない、ブラジルにだってこの問題に目覚めた人間はちゃんと存在するんだということを、この曲は明快に伝えてくれたのだ。そしてブラジルにおけるバイアという土地の位置と意味。バイアが全く異質なものなのだと初めて教えてくれたのが、このアルバムだった。

79年の『レアルシ』には、より強力なパンチを食らった。ジルの新曲「レアルシ」は、ギンギン



のLA録音！？ ラジオで散々かかったこの曲が一段落すると、次は「サララ・ミオロ」。言葉の綾とりズムの妙。それにしても、この2曲が同じアルバムに収まっているとはどうしたことだ。さらに、意味深い歌詞を持つ「スペール・オーメン」。バイアそのものの「トーダ・メニーナ・バイアナ」。そして極めつけが「ノー・ウーマン・ノークライ」。レゲエ！？

どの曲にも大変驚かされたが、最初のインパクトの後は不思議にも、「やっぱりジルだからな」とすんなり納得できてしまった。考えてみれば、ジルは作品毎に常に新しい方向を打ち出してきていたのだ。しかも未消化でいい加減なものは、決して表には出さない。“ヒット曲は安易なもの”との通念を覆すかのように、どの曲もあまりにも完璧な出来で、気楽に聞き流すことができない。類稀な比喩が独特の世界を作り出すその歌詞は、「家

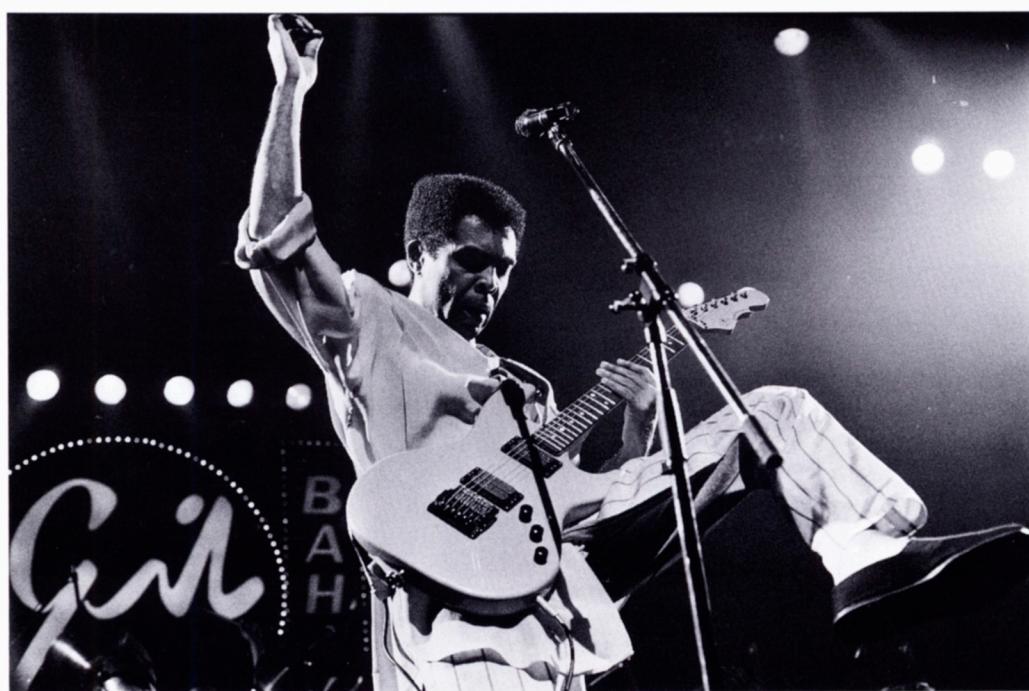
族」「文化」「神と宗教」「アフリカ」「カリブ」「バイア」「ブラジル」「社会問題」などあらゆるテーマに取り組み、それを結び付けようと試みつつ、常に自己の内側と向かい合って掘り下げていこうとするかのようなジルの姿勢を反映してきている。内省的な彼だからこそ、歌詞がうわつかない。熟考型のジルだからこそ、音がピシッと決まるのだ。

それから2年を経て、『ルアール／月光』が登場する。「バルコ(舞台)」では、きらびやかなジルのもう一つのイメージがすっかり定着した。「レンチ・ド・アモール」は、メロディーの美しさを十分に聞かせてくれた。そして「神と対話したいなら」。平凡なカソリック信仰に終わらないジルの宗教観を垣間見せる作品だった。

ところで、この後ジルは一種の方向転換を実現する。82年のジュゲムジュゲム的『ウン・バンダ・ウン』、83年の『エキストラ』、84年の『人類』と、毎年アルバムをリリースしながらも、ジルはそれまでのメディアが鼓舞する世界からは一歩退いた形だ。だが、たとえブラジルでは「ラジオで曲が頻繁にかかる」「テレビの連続ドラマのサントラに曲が採用される」「テレビの人気バラエティ番組に出演する」というのが成功への三大レシピであれ、ラジオが流すヒット曲を作らなくなつたからといって、ジルのアーティストとしての地位が今さら揺らごうはずもない。金のある者はアルバムを買うし、ない者は他人に借りる。静かにではあるが、着実に彼のメッセージと音楽の方向は人々に迎えられていく。「信念とともに歩む」や「ファンクのすすめ」、「都市のあばら家で」や「ホッキ・サンティロ」、そして「南アフリカ解放への祈り」など、ジルは常に新たな問いを投げかけることを忘れない。

デビュー以来20余年。様々な外的的な屈曲を経て、ジルは確実に自身とその音楽のクオリティを高めてきた。また常に一步人々に先んじて、様々な思想的アプローチを世の中にぶつけてきた。音楽という媒体が、どれほどブラジル人を揺さぶることができるかという最も明快な例の一つがジルであり、それゆえ彼の作品は、どれも使命感に満ちあふれたものである。その使命感をジルは、後にサルヴァドール市議に立候補し当選するという、別の方向でも打ち出した。今や彼の音楽世界は、単に音楽の次元のみに留まらず、さらに自身の力を直接行使できる場へと広がっているのである。そしてその広がりと制約、自身の変容と世界の動きを、ジルは最新作『永遠の神「変・革」』にしっかりと記録している。

一人の人間の歩みと成長、世界と時の移り変わりを、確実に作品と聴く者とに反映させることのできるアーティスト、それがジルベルト・ジルなのだと思う。「観客との間に隔たりを置こうと考えたことは一度もない。むしろその逆だ」とのジルの言葉がそのまま、聴く者からのエコーとなって戻ってくる。そうした世の中とのやり取りの中で得たものを、今度は凝縮し昇華させた形で音に託して送り返すジル。時代との果てしないピンボンゲームでエネルギーを得る彼が、今の情報交錯も甚だしい音楽世界において指導者の存在であったとしても、何の不思議もないではないか。



混血音楽創造の地バイーアとその先駆者ジルの偉大さ

中原 仁

ボクはバイーアからやってきた
ボクの町、バイーアには素敵なものがいっぱい
ボクの空、ボクの土、ボクの海……（中略）
ボクはバイーアからやってきた
でもいつの日か、そこに帰る

“EU VIM DA BAHIA” GILBERTO GIL

バイーアの持つ魅力は、非常に皮膚感覚的なものだ。訪れたものはみな、この地の空気、あるいはオーラに包まれ、何とも不思議なトリップ感を味わうことになる。

バイーアは、かつてブラジルがポルトガルの植民地だった時代、最初に総督府が置かれたブラジル最古の都で、現在、行政上はバイーア州サルヴァドール市となっている。

そして、バイーアにはアフリカ大陸からの奴隸船が入港した。アフリカ人奴隸はまずバイーアに上陸し、ここからさまざまな場所に散っていったのだ。つまり、バイーアはブラジルにおけるアフリカ文化の一里塚であり、ブラジル混血文化の発祥の地だったのである。

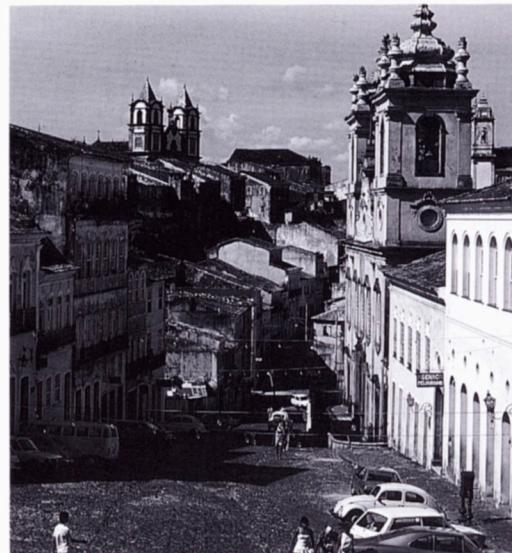
今でもバイーアは、ブラジル中で最もアフリカ系ブラジル人の人口比率が高い。かつての支配者階級、ポルトガル人が作ったヨーロッパそのものといえる町は、いまやかつての被支配者階級に属していた黒人の天下になっているのである。だから当然、バイーアにはアフリカ伝来のさまざまな文化が今も残っている。いや、残っているどころか、最初に書いたバイーアの持つ不思議な、皮膚感覚的な魅力とは、この地に根づいたアフリカ文化の伝統のなせるワザにほかならない。

ただしバイーアが、世の中の動きから取り残された「伝統」という名の温室のような所かというと、実はまったくその逆。バイーアの空気はとてもエネルギーだ。特にバイーアの音楽家は、バイーアとアフリカとを結ぶ絆を土台にして、たくましく貪欲にアフリカ・ルーツの文化を消化している。南北アメリカ大陸やカリブ海の島々に伝わり、それぞれの場所で独自の発展を遂げたアフリカ・ルーツの多彩な音楽は、相互影響を与えあいながら新たな混血音楽の道を進んでいるが、それを最も早くから実践してきたのがバイーアの音楽家だ。その中でも先駆者の存在が、ジルベルト・ジルなのである。

60年代後半、まだ20代の青年だったジルは、大学時代からの音楽仲間であるカエターノ・ヴェローゾらとともに、ブラジルのポピュラー音楽界に新しい波を起こした。ジョン・ジルベルトのボサノヴァを出発点として、ブラジルの伝統的な音楽を見直し、そこにビートルズに代表されるロッ

クなどの外来音楽の要素を取り入れ、若者のための新しいポップ・ミュージックを作ろうとしたのだ。それが「トロピカリズモ」と呼ばれるムーブメントで、これは単なる音楽上のスタイルを指す言葉ではなく、社会に対する問題提起をはらんだメッセージ、更に彼ら自身のライフ・スタイルまでが一緒になった、トータルなカウンター・カルチャーの象徴語だった。

さて、ジルが自分のルーツであるアフリカを正面から見据え、アフロ・ブラジリアンとしてのアイデンティティーを音楽を通じて積極的に打ち出したのは、70年代の半ば頃だ。1977年、ナイジェリアで行なわれた黒人芸術文化フェスティバル（FESTIVAL OF ARTS AND CULTURE）に出演し、同時に西アフリカ各国を回ったジルは、アフロ・ブラジル文化と黒人意識の高揚をテーマとする問題作『レファヴェーラ』を発表。ブラジ



ルにおける黒人文化の温床ファヴェーラ（都市のゲットー）への賛歌と呼べるこのアルバムで、アフリカ音楽やレゲエ、ソウル・ミュージックなどのアフロ・ルーツ・ミュージックの要素を取り入れた、汎アフリカン混血音楽の道に進み始めた。80年代に入ってからは、ボブ・マーリーのヒット曲「ノー・ウーマン、ノー・クライ」にポルトガル語の詩をつけてレコーディングしたり、ブラジルでのコンサートでジミー・クリフと共に演じたり、そしてボブ・マーリー亡き後のウェイラーズとレコーディングで共演するなど、特にレゲエに接近してきた。

バイーアでのレゲエ人気は想像以上に高く、街に「レゲエ・バー」があつて壁にボブ・マーリーのポスターが貼られていたり、FMでもよくレゲエが流れてくる。ジャマイカ人みたいなドレッド・ヘアの人間も大勢いる。これは単なる人気というだけのことではない。バイーアの黒人は、レゲ

エという音楽を通じてアフリカ・ルーツの黒人意識を打ち出しているジャマイカ人への、同胞意識を持っているのだ。このことはジル自身も発言しているし、僕自身、もっと若いバイーアの音楽家たちからも、同じような発言を聞いた。

さて、ジルから始まったアフロ・ブラジル混血音楽の道は、後輩の音楽家にも大きな影響を与えている。ジルやカエターノをバイーア発の新しい音楽の第一世代とすると、第二世代に当たるのが70年代に登場した「オス・ノーヴォス・バイアーノス（新しいバイーア人たち）」なるグループ。モライス・モレイラ、ペペウ・ゴメス、ペイバー・コンセエロなどで、ロック・イディオムを大幅に取り入れた新感覚の音楽をやってきた。今はみんなソロで活動しており、中でもモライス・モレイラはバイーアより更に北東部に当たる地域のダンス・ミュージックを取り入れ、コンポーザーとしても多くのヒット曲を放っている。

そして80年代の中頃から、第三世代に当たる新勢力が登場する。その先陣を切ったのがルイス・カルダスで、「デボーシ」「フリコーチ」と名乗る、バイーア産のアフォシェのリズムに北東部のフレヴォ、更にメレンゲ、ソカなどのカリビアン・ミュージック、そしてファンクなどをミックスしたダンス・リズムを作つて一躍スターの座についた。カルダスの成功がきっかけになって、ジェロニモ、シクレッチ・コン・バナナ、バンダ・ヘフレクス、バンダ・メル、マルガレッチ・メネゼスなどなどなどなど（！）、20代から30代前半の音楽家がドドドッと登場。バイーア人の柔軟な発想でアフロ=ブラジリアン=カリビアン・サウンドをあけらかんとミックスした「捉なし、何でもあり」の混血ポップス路線を疾走している。かのランバーダにしてからが、いろいろある中の一部にすぎない。

こうしたポップ軍団の音楽にも影響を与えるながら、よりネイティヴなアフロ・ルーツ・ミュージックを志向しているのが「プロコ・アフロ」と呼ばれる大編成のパーカッション&コーラス&ダンス集団。楽器の編成はリオのサンバ・グループに近いが、よりアフロ色の濃いリズムが特色で「サンバレゲエ」という呼び名からもわかるように、レゲエに共通する響きもある。歌詞の精神性も高く、黒人意識の高揚、地球上のあらゆる所にいるアフリカン・ピープルの連帯を訴えるポジティヴなものだ。プロコ・アフロのリズムは最近リオのサンバにも影響を与えており、海外のロック・ミュージシャンからも注目を集めている。たとえば代表的なプロコ・アフロ「オロドゥン」はポール・サイモンのレコーディングに参加したし、一方の雄「アラ・ケトウ」はデヴィッド・バーンがバイーアで撮影したヴィデオ作品『イレ・アイエ』の冒頭シーンに登場した。

バイーアはジルの言葉を借りれば「文化のメルティング・ポイント」であり、ワールド・ミュージックなんて言葉が生まれるはるか前から混血音楽の創造の地として機能してきた。今、バイーアの音楽シーンは百花繚乱のにぎわいを見せているが、バイーア第三世代の元気なエネルギーの背後には、明らかに先駆者であるジルの影が見える。あらためて、ジルベルト・ジルの大きさを感じずにはいられない。

新文化に寛容な自由の地バイーアとジルの世界進出法

安田 恼

例えばメキシコのベラクルスや、ベネズエラのマラカイボのように、その土地と人間そのものから強烈に「音楽」を感じることができる地方というのがある。こういう地方では、大体、どんな方向にカメラのファインダーを向けても「音楽的」な写真になるものだし、レコーダーの録音ボタンを押し続けて、たとえそこに音楽が鳴っていないくとも、すべての物音から「音楽」を感じることができるものだ。

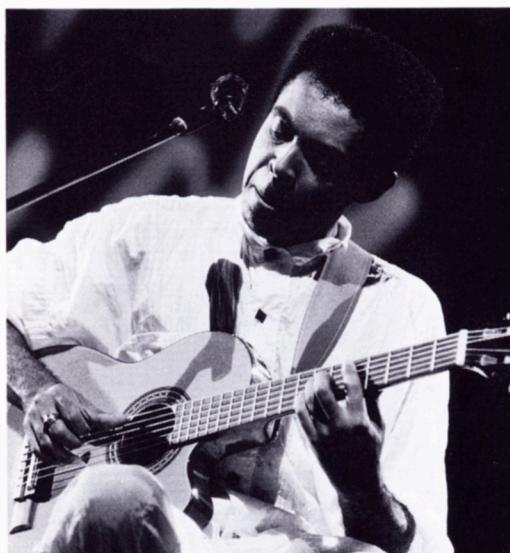
ブラジルの北東部バイーア州の州都サルヴァドールは、まさにそんな「音楽的な」地方を代表する街である。一年中が祭りといわれるくらい、この街の住民は祭り好きで、祭りには必ず音楽が大活躍する。数年前、いわゆるカルナヴァルのシーズンにこの街を訪れたことがあるが、確かに聞きしに勝る「祭り」だった。アフォシェと呼ばれるアフロ=ブラジルの大チーム(リオのエスコーラ・ヂ・サンバや徳島の阿波踊りの連のようなもの)がたくさんあって、アンゴラ伝来の格闘技カポエイラや、アフロ色の強い舞踊を披露しながら街中を練り歩くわけだが、そのアフォシェとアフォシェの間には、この地方独特の4弦小型エレキ・ギターを中心とした「トリオ・エレトリコ」というバンドと、PA装置、照明装置を満載して、けたたましい音楽を響かせながら進むトラックが挟まれる。伝統舞踊とディスコが交互に行進しているみたいなもので、街の住民たちは、それぞれ勝手に好きな方に入って「祭り」を楽しむわけである。街の中心にカストロ・アルヴィス広場という広場があって、ここでいろいろな通りが交差するのだが、いくつかのトリオ・エレトリコがここに集結した時だけたましさといったら、普通の人間には恐怖というしかない。しかも、この広場には特設のバールが並ぶのだが、鶏のゆで卵がダース単位で販売され、飛ぶように売れる。元気のもとと考えられているからだ。日程も行進場所もすっかり決められたりオのカルナヴァルと違って、サルヴァドールではもっと長い期間、街中のすべての通りを使って続けられる。観覧席もあるにはあるが、その座席券が百ドルもするなんて馬鹿なことはないし、だいいち行進に参加すること自体が自由なんだから、観覧席など必要ない。さらに、もっとカルナヴァルを楽しみたければ、サルヴァドール市以外の近くの街を移動して歩けばいい。いつまでも楽しめる仕掛けになっている。

ところで、ブラジルのポピュラー音楽シーンで重要なアーティストのほとんどが、この街と同じバイーア州の出身であるという事実は大変に興味深い。ジョアン・ジルベルト、ドリヴァル・カイ

ミ、ジル、カエターノ、ベタニア、ガル、シモーネ、モライス・モレイラ、オロドゥン、マルガレッタ・メネゼス……。さらに、最近世界を騒がせている「ランバーダ」というリズムも、この街からサンパウロ、パリと渡って世界へ出ていった。少し古い話では、50年代から60年代にかけて、ヨーロッパで騒がれた新しい映画の運動「シネマ・ノーヴォ」もこの土地から発信された。

奥の深い、不思議な魅力を持った街である。

4年前、ジルベルト・ジルはこのサルヴァドール市の名誉市民となった。そして2年前、ジルはこの街の市長選に立候補しようとした。最終的に政党内の争いに負け、市長選には立候補できなかったが、市議会議員としてトップ当選した。音楽家が政治の世界に踏み込むことは想像以上にたい



へんなことだが、ジルは海岸地帯に大文化施設を造りあげることに尽力したり、世界の黒人芸術の祭典を企画したりと、市の文化行政では着実に実績をあげている。それでも、反対派は常に存在して「ジルは街のために何もしていない」などと宣伝されてしまう。2年前、サルヴァドールで政治家になる真意を彼に尋ねたことがある。彼は「これは大変に個人的な問題だ。政治の世界に踏み込んで、挫折したものがどうなるか、よく知っているつもりだ。でもね、僕はやらなきゃならないんだ」と思いつめたように答えてくれた。もっと具体的な答えが欲しい気もしたが、その時はそれ以上突っ込めなかった。

バイーアという地方は、いろいろな意味でブラジル社会の中でも特異な存在である。わかりやすい例でレコードのマーケットをみても、バイーアは南の大都会サンパウロとかリオとは全く別種のセールスを記録する。あのランバーダなんかは数

年前まで、このバイーアでしかなかったブームだった。それがサンパウロで評判になったのが3年前。リオなどは、昨年になって世界が騒ぎだしてからようやく注目される始末である。

バイーアはまた、ブラジルの中でも黒人の多い地方だ。昔、ブラジルがまだ植民地だった頃、総督府がサルヴァドールに置かれていたから、アフリカ奴隸たちは、ここを経由してブラジル各地に運ばれていったという事情からだ。ところが、このサルヴァドール市長には歴代、選挙で黒人が選ばれたことがない。たった一度だけ、ある市長がリコールされた時に、黒人市長が知事に任命されて誕生したことがあるだけなのだそうだ。

ブラジルには人種差別がない、とよく宣伝されているが、現実はまったくそうではなく、就職機会、賃金、教育機会など、あらゆるところに差別は存在している。バイーアですらだ。

ジルベルト・ジルの政界進出が、この辺の事情と無縁でないことは容易に想像できるが、ジルの夢は恐らくもっともっと大きいに違いない。今度会ったら、是非その辺りのことを聞いてみたい。

ところで、ジルが盟友カエターノと組んで70年代に起こしたトロピカリズモという音楽運動は、ブラジルのポピュラー音楽にとって、いくつかの点で大変に重要だった。これは「どこよりも豊かなブラジル音楽が、今までには外国人に演奏されることによってだけ世界に出ていた」ということによってだけ世界に出ていた。これからは、自分たちのサウンドももっとユニヴァーサルにし、自分たちの手で世界に押し出そう」という運動だった。ユニヴァーサルに発言すること、すなわち自分のルーツを見つめ、それを共通の手段で表現すること、という感覚をブラジル人ミュージシャンたちが備えていたことは、その後のブラジル音楽の世界進出が活発に行なわれたことが実証してくれているが、今になってみると、この発想はブラジルはもちろん、カリブやアフリカのミュージシャンにも同様の影響を与えて、現在のワールド・ミュージック・ブームを呼んできた、という見方も実に説得力を持って成立する。しかしこれも、伝統的なカルナヴァルに「トリオ・エレトリコ」を早々と取り入れて、それを伝統儀式に簡単に組み込んでしまうという、バイーアという新しいものに対して完全にオープンな土地柄だからこそ育った運動だったとも言えそうだ。

ブラジルという歴史の新しい国を愛する方法として、過去を振り返ってブラジル性を見つけることだけではなく、若い土地、若い国だからこそできる利点を見つけてそれを伸ばし、逆に世界に影響を与えてゆく。ジルのキャリアをみてみると、この後者の考え方方が彼の方法だと思う。今度の最新アルバム『永遠の神「変・革』にはあちこちにそんなジルの想いが散りばめられている。彼は自分の生き方と、音楽を通して、常に若者にエネルギーを送り続ける。そして、その対象となる「若者」は、よく考えると、ジルも含めた世界中のエネルギーに生きたい人間たちである。

今回の日本公演で「日本で夢の写せるカメラが欲しい。もう売り出せていたら……」と歌われて、ただ喜んでいられない。写されたわれわれの夢がジルのように大きく、自由なものであってくれれば問題ないのだが……。



かつて奴隸市場だったベロウリーニョ広場。ここは4年前、ジルがサルヴァドール名誉市民になったとき、記念イベント会場となつた

BAHIA



サルヴァドールはブラジルでもいちばん黒人文化の色濃い地。街のいたるところにアカラジエ売りのおばさんが店を開いている

SALVADOR



サルヴァドールはブラジルがまだ植民地だった頃、総督府が置かれた街。全ブラジル人の心の故郷として愛されている



これも“アフリカ伝来”的格闘技、カボエイラ

曲目紹介

佐藤由美

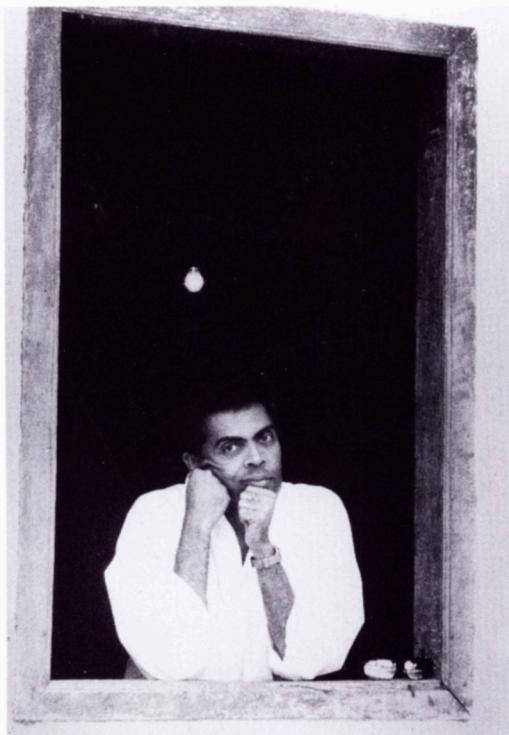
●第1部●

1. 人生

Vida

「人間の人生とは、そんなもの……人生は喜び、人生は私に快楽を与える。人生は日々の光、私に命を与える。人生は空虚、人生は愛、人生はごたごたと混乱。そして人生は太陽と情熱」

アフリカン・ポップスを思わせるギターとマリンバの響きを孕んだサウンドに導かれる軽やかなナンバーで、ステージの幕は開く。ジルが強力に応援しているアフリカ=ブラジル混合グループ、オビナ・ショッキのヒット曲で、マリア・ジュカーニとロジャー・ケディの作。ガボンのミエニ語で「ダンスの王道」を意味する「オビナ」と「ショック」を結びつけた名を持つこのグループ、ガボン、セネガル、スリナム、そして5人のブラジル人による8人編成。ジルは彼らのアルバムにゲスト参加するという熱の入れようだ。



2. アンダール・コン・フェ

Andar com fé

「信念とともに歩む」という意味を持つ、オープニング曲「人生」と同傾向のジルが作った歌。「私は行く、信念とともに。信念があれば失敗はないものだ。信念はどこにある?女の中に、とぐろを巻く蛇の中に、パンのひとかけらに、潮の満ち引きに、短刀の刃に、光の中に、それとも闇に?……」ジルの血の中にあるバイアのアフリカと現在のアフリカのサウンドが、柔らかに、見事に合体・結晶した、ジルお得意の言葉遊びを盛り込んだナンバーだ。

3. バチクン

Baticum

ジルの最新アルバム『永遠の神』に、ブラジル音楽界のもう一人のボス、シコ・ブルキとのデュエットで収録されていた新曲。ジルとシコの共作だ。シコ特有の、企業名を織り込んだシニカルな歌詞が面白い。「バチクン」とは音楽入りお祭り騒ぎを表わした言葉で、手拍子や足を踏み鳴らす音 자체をも指す。「みんなが楽しんだ海辺のバチクン……あの夜、いいもの、最高のものをいっぱい詰め込んだバチクン……ベネトンがスポンサーをかけて出て、サンヨーが音響を保証して、ワーナーがそれを録音して、グローボがオンエアするんだってさ……マッキントッシュがヴァタパー(バイアの代表的料理のひとつ)をさしいれして、ジョルナル・ド・ブラジルが批判文を掲載する……」



4. 都会のあばら家で

Nos barracos da cidade (Barracos)

レゲエのスタイルで刻まれるこの曲は、ジルの85年に発表されたアルバム『ふたつの月』の代表的ナンバー。世界の大都市が抱える共通の問題を深くえぐり出す社会のテーマが描かれている。とりわけ、貧困層と富める者との差が著しいブラジル社会を批判した内容だ。「都会のあばら家では誰にももう夢がない。決定を下すのは権威筋の権力……知事は約束する。だがシステムがノーと言う。大きな利益があるのに、誰も握りしめた手を開こうとしない。ほんの一部を手放すだけで、解決できていることなのに……」ブラジルのスラムの現実を見つめる、ジルならではの強烈なメッセージだ。

5. おいで、モレーナ

Vem morena

昨年の8月2日、ブラジル北東部音楽を代表する音楽家ルイス・ゴンザーガ翁が76歳の生涯を閉じた。ブラジルの中の辺境扱いされていた北東部の音楽をブラジル、ひいては世界にも知らしめたゴンザーガの功績は計り知れないものがある。アコーデオンとそのうるんだような喉で、バイオリンの王様と謳われたゴンザーガは、ジルの最も敬愛するアーティストの一人であった。ジルは、彼に大きな音楽的影響を受けたと語っている。少年時代にはゴンザーガを真似てアコーデオンも弾いていたという。この曲はゴンザーガのヒット曲のひとつで、ジルらしい今日のポップなエネルギーで甦っている。

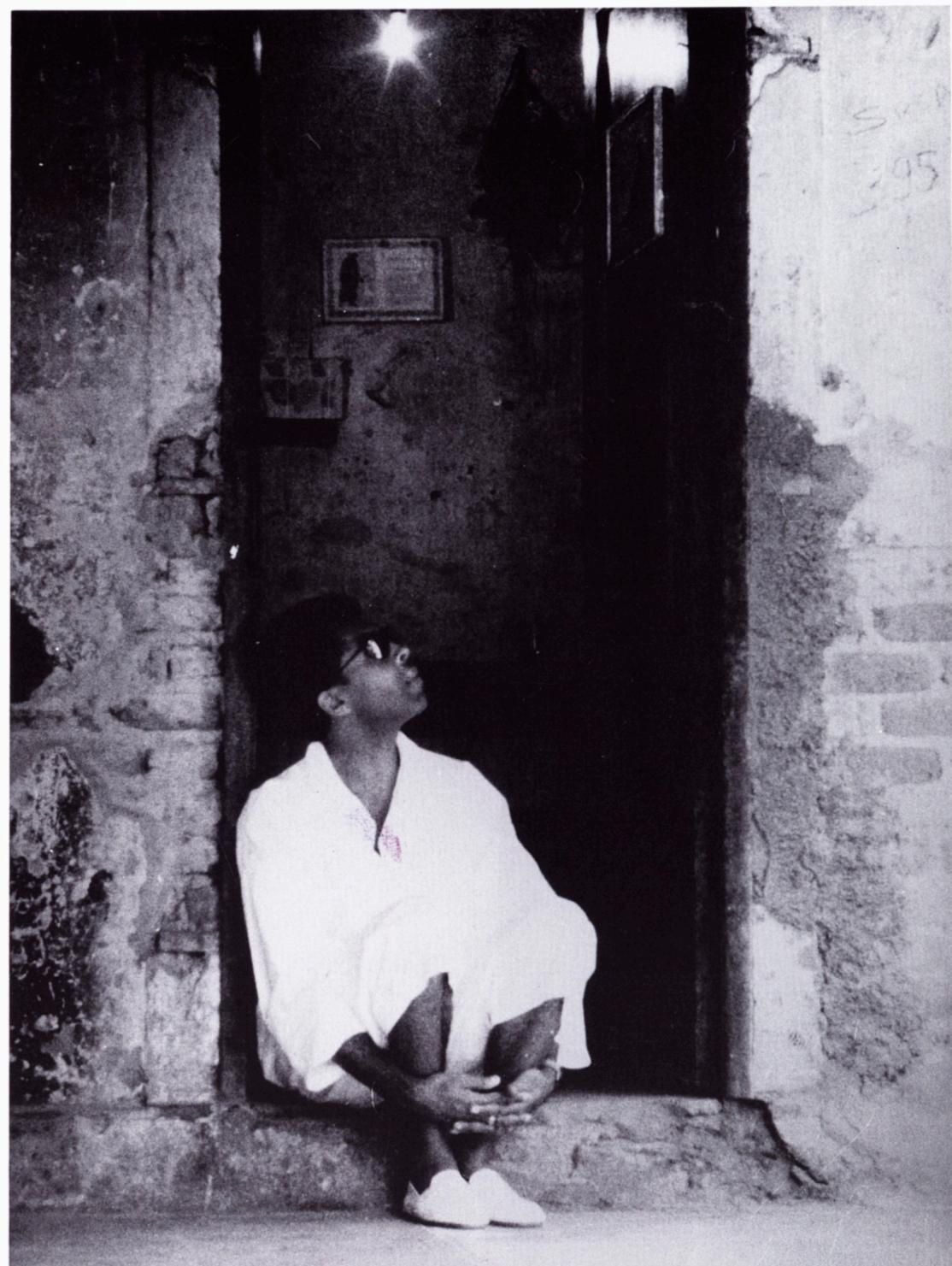


6. 挑発のサンバ

(ボブ・ディランからボブ・マーリーまで)

De Bob Dylan a Bob Marley um samba provação

最新作で発表された刺激的内容の、しかし聴いている限りはとてつもなく明るいサンバ。ジルがロンドンで亡命生活をしていた当時のアイドル、ボブ・ディランとジルの永遠のアイドル、ボブ・マーリーをその生きざまを盾に隔て、突き刺した物凄い詩……。繰り返しのフレーズだけでも、その挑発度が窺い知れる。「ボブ・マーリーは死んだ。黒人である上にユダヤ人であったから。マイケル・ジャクソンはまだ生きている。白人である上に、悲しいやつに成り下がったから」今年の1月、ジルとリオの大コンサートで同じステージに立ったボブ・ディランは、この挑発をどう受け止めるだろうか?



7. キロンボ

Quilombo, o eldorado negro

84年、コロンビアのカルタヘナで開催された国際映画祭でラテンアメリカ最優秀賞を獲得した、カルロス・ヂエギス監督作品「キロンボ」のテーマ曲となった、ワリー・サロマウンとジルの共作によるサンバ。「キロンボ、黒人黄金郷」と題するテーマは、1650年の史実に基づいて描かれている。黒人逃亡奴隸たちが築いたユートピアの物語。ジルの歌うこの曲は、ブラジル・ポピュラー音楽(MPB)を紹介するためにかのデヴィッド・バーンが編集したアルバム『ベレーザ・トロピカル』に収録されている。



8. アケリ・アブラーソ

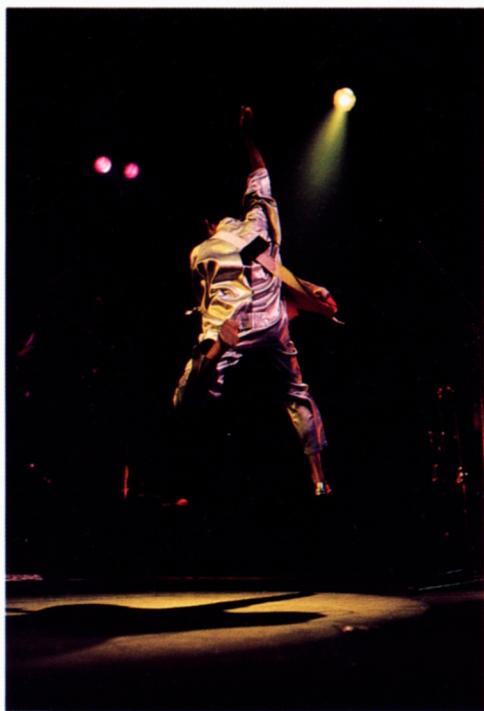
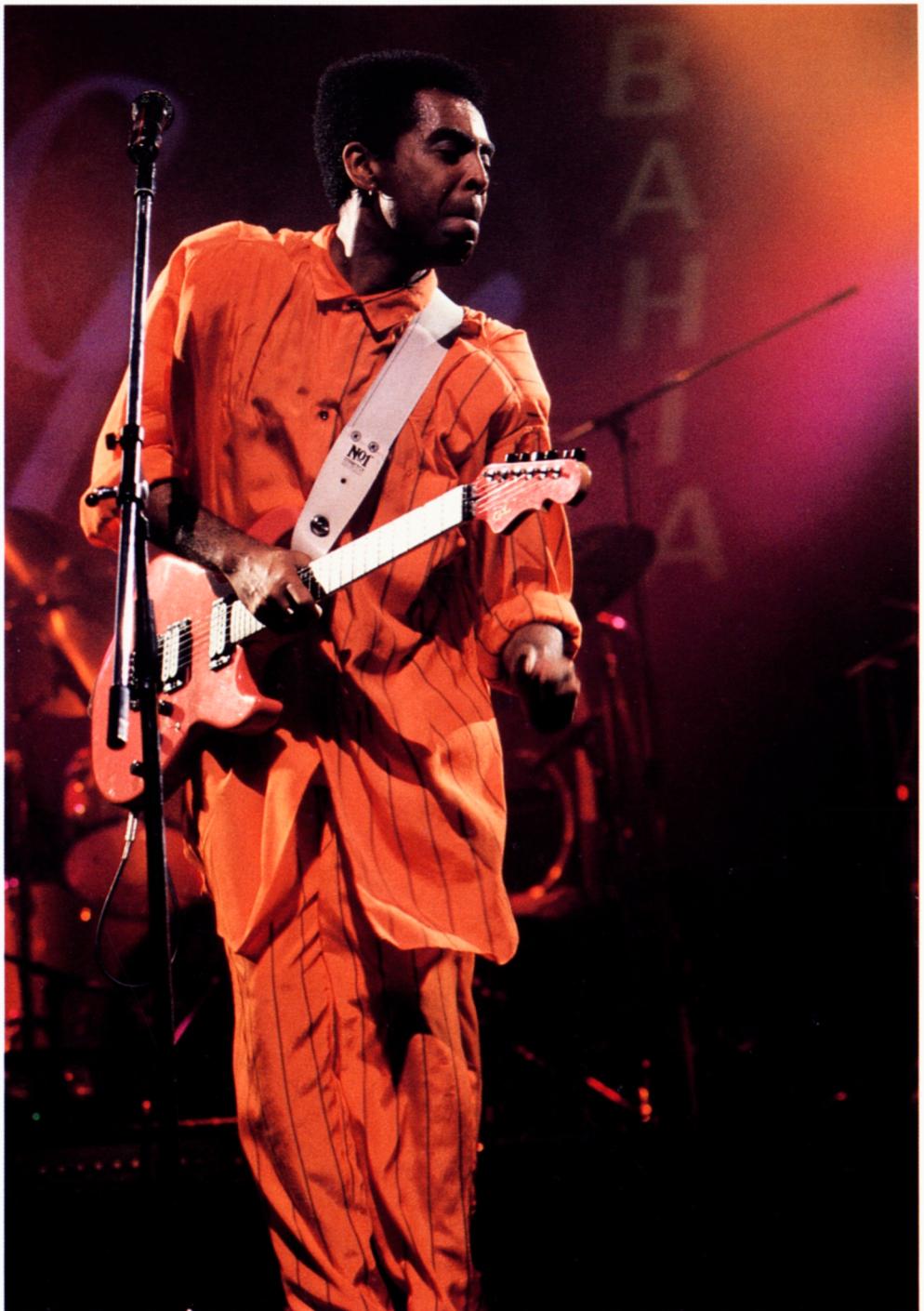
Aquele abraço

「あの抱擁」と題するジルのスピード感溢れるナンバー。前回、86年の来日ステージでも好評だった演目だ。ジルを取り巻くさまざまなものに、祝福と挨拶をおくっているかのようである。



G I L B E R T O

G I L



曲目紹介

●第2部●

1. わが第三世界

Mon tiers monde

ゆったりとしたフランス語によるジルのオリジナル新曲。しかしメッセージ性はまたしても強烈。「一瞬も無駄にしちゃならない。死自体よりもなお、人類の死は薄汚い。わが第三世界は“生”を約束されているのだ……今のところは、それでも動いている。この事実無に等しい野蛮な現実。わが第三世界は“生”を約束されているのだ。この眠りの底から、まさしく眠りの底から、太陽を取り戻せ、取り戻せ太陽を、この最良の友を……」

2. 日本

Do Japão

70年代初めに、ジルは日本への憧れを綴った「オリエンチ（オリエント）」なる歌を作った。「若者よ、かの日出する国に行けるという可能性について



ジルとジミー・クリフの共演(80年)

て思いめぐらせてみたまえ」と呼びかけたジルの、長きにわたる夢が叶ったのが86年のこと。2度目の来日を期して(?)ジルが作ったこの曲はユーモアに富んだ、実に愛すべき内容だ。「日本が作る、夢を録画できるカメラが欲しいな。悲しみのトンネルもあっという間に通り抜けてしまえるような、日本が作るココ椰子でできた新幹線も欲しいな。……僕の不満を瞬く間に情熱に変え、未知の野性を掘り起こすことのできるゲイシャが欲しいな……」などと、ジルは歌ってくれる。

3. メニニーニヤへの鎮魂歌

Requiem pra mãe menininha do Gantois

ブラジル黒人文化の象徴的存在であり、全ブラジル人に慕われ、とりわけ多くのアーティストたちにとっては精神的支柱であったメニニーニヤこと「ガントワの母」の死を悼んで作られた静かなレクイエム。ちなみに、バイーアの仲間の一人であるカエターノ・ヴェローザの妹マリア・ベタニアも、このガントワの母に捧げるテーマを最近アルバムで取り上げている。

4. フローラ

Flora

弾き語りによるこの穏やかな曲は、今回も大好きな日本をジルと一緒に訪れている愛妻フローラさんのために作られたメロディなのだ。「考へてもごらん、いといきみよ。円熟した美しさはまだまだ抜群。純粋な愛の味、木いちごの味、あでやかな甘やかさの中で、すべてが光り輝く。あなたの木陰の下で、きっと僕は眠ってしまうよ、フローラ」どうです、女たるもの、ここまで称えられたら応えるしかないでしょう。羨ましい……。

5. インディゴ・ブルー

Indigo blue

ジルが84年に発表したアルバム『ハサ・ウマーナ(人類)』に含まれていたレゲエ・ナンバー。『ハサ・ウマーナ』で、ジルは今は亡きボブ・マリーのバンド、ザ・ウェイラーズと初の共演を果たしている。ジルはレゲエ界のもう一人のスター歌



手、ジミー・クリフと80年にブラジル・ツアーや行ない、ボブ・マーリーの曲「ノーラーマン・ノーライ」を70万枚を売り上げる超ヒットに導いている。ジルはブラジルにいち早くレゲエを持ち込み、ブラジルでもっともレゲエが血肉に溌み込んだアーティストである。

6. ステア・イット・アップ

Steer it up

元年のボブ・マーリーが発表したアイランド・レコードでの1作目「キャッチ・ア・ファイア」に収録されていた情熱的テーマ。81年に30歳の若さでこの世を去ったボブ・マーリーを偲んで、ジルが彼の名作を思い上げる。なお、彼が7年か前にボブ・マーリーはブラジルを訪れており、ブラジル人アーティストたちとサッカーの試合に興じるという楽しげな記事を、かつてブラジルのグラフ誌で見かけたことがある。そして今日のレゲエ・アーティストたちは再びブラジル、とりわけバイアへの興味を高め始めているし、バイアを中心とする若いジェネレーションはレゲエをこよなく愛している。バイアにはボブ・マーリーを崇拜するアフロ・カーニバル・チームが数多くあり、彼らはみなジルの弟たちと並ぶ存在なのだ。

7. アメリカ、おまえに夢中

Soy loco por ti América

スペイン語を織り混ぜた、前回の来日公演でも好評だった曲のひとつ、キューバ音楽のスタイルを秘めたテーマで、この「アメリカ」とはアメリカ大陸全体の問題意識に基づくもの。カビナンとジルの共作曲。ジルはキューバで開かれたラダーポルタフェスティバルに参加するため彼地を訪れたことがあり、よりキューバ音楽への共感を深めている。

B. 永遠の神「変・革」

O eterno Deus Mu dança

ジル最新作のタイトルともなっている題名にいたしたテーマ。「変革」と「ムード踊り」というふたつのかけことはともなっている「ムード・ダンサ」がキーワード。ジルらしい若者を支援するメッセージである。「若いやつらは、どこへ行っても不満だらけだと感じてる。こんなことは駄目などだと感じてる。やつらの行動には、はっきりとした決意がある。感じていることを叫ぼうという決意だ。やつらが求めているのは変革だ。今日が変革のその日だ。今が、変革のその時だ。これが、変革の意志表示だ。……西洋が崩壊してゆくさまを感じ入れ。少しある時から湧き出るすべての流れは、未来への道筋をたどり、街を伸びる。さあ、躍れ! 感じ入れ! 立ち上がり!」

9. 僕の仲間に手を出すな

Toches pas à mes potes

フランスでの人種差別反対の標語となった「僕の仲間に手を出すな」をタイトルにした、ポップなナンバー。ジルはパリの某オートクチュールの店で、東洋人であるが故に不愉快な体験をしたことがあったという。その経験を踏まえてフランス語でジルが作った、軽快だが、決してただの雰囲気に終わらない重要な曲目だ。



10. すべてのバイア娘たち

Toda menina baiense

バイア娘たちの輝きを称えた、とてもなくキラキラした、元気の溢れるナンバー。バイアの光、サルヴァドールの街に溢れる生気。エネルギーを解放するかのようなスピード感は、エンディングの序章にふさわしい。

11. パルコ(舞台)

Palco

「舞台に立つと、僕の心は渾ん坊のかわいいお尻みたいに、タルカルムバウターの香りがする。素晴らしい僕の名聲も、頭の浮えた人にしか分からなかいだろうし、楽隊を連れて來ても、ルアンダ(ア

ンゴラの首都)がどこにあるのか知っている人にしか、価値は分かるまい。ドラムのクレイジーな響きの好きな人はほど、その価値の高みは感じてやくものさ。永遠の炎は消えぬため、見知らぬ土地の地獄。永遠の炎は消滅のため、地獄よどこかへ消え失せろ。……采配をさるのは音楽の女神。芳しい香りをあふれ出るままでして、美しいを詠し続けるんだ」

81年のアルバム「ルアル(月の光)」に収められていた楽曲ナンバー。ジルのステージ貌がストレートに表現されている。この曲で、気持ちはよくからだをジャンプさせていただきたいものだ。

● 著者は吉安真希氏。高橋裕典氏の訳を引用させていただきました。



MUSICOS



ラウル・マスカレニャス(サックス、フルート)
RAUL MASCARENHAS (saxofone, flauta)

ミナス出身。31歳。1981年伯で音楽活動開始以来、エイ・マーヴィングン、モライス・レイバ、ガル・コスタ、マリ・ペタニアなど、若手のアーティストと共演。近年から巴伊馬リオ・フランシスコに通じ、パウ・フランジのメンバーとして活動したほか、現地でブラジル音楽の発展に貢献。その後、エルメート・ノコアフルのバンドに加入。そしてニニョ・オダ、リカルド・シルヴィオ、リック・パントージラウイング等衆多のアーティストと共演。近年はソリストとして活動するようになり、フランスとアメリカでWE&YOUアーティスト・ブルームをリリース。最近ジルがゲスト参演したセカンド・アルバムがコラス・レペルより出たばかり。題字に次ぐジルとのCD。



ペリーニョ・サンタナ(ギター)
PERINHO SANTANA (guitarra)

ジルと同じくバーバード音楽アーチー・デミオの元学生。父のジルからオカリナ演奏を開始。周囲にはジル、カエロ・ガル、ペタニアによる音楽団ショーツ・トリス・バルバロスに参加した後、ジルのアルバム「ルファゼンダ」「レフカヴェーラ」の収録で実験曲。ジルとともにナシジニアで活躍された人気新星樂團に所属した。周囲にはジルのショーツ・トリス・バルバロスで「ペタニア・ジルのアメリカ」、ヨーロッパ・ツアーズ「アルゼン」のLA公演に参加。また他の開拓者たるセザル・カラゴ・マジーンと并出した「レフレクシ」は注目を集め。日本では日本ではエスターの「ワード」で、さらにはヨリ明けは「コル・ド・ソニ」で、現在はソリストとしても国内外で大いに活動している。



ウィリアム・マガリャンイス(キーボード)
WILLIAM MAGALHÃES (teclada)

グループ唯一のリオ出身者で現年36歳。10歳でクラシック、ギターをヴィラーロス音楽院で学び、その後セスピシア・タビリスに加わり、有名なブラジルの元老ファンク・バンド、パンダ・ブラッサ・リオのサックス奏者だったカルベル・カルボの元老の面影を受けた。母親でピアノを演奏し始めた、クラシックからジャズ、ポップ、さらにMPB(グラフィル・ポルトガル語曲)のアーティストへの没落によるクリスチーナの歌詞シーンでの活動がスタート。タップ、ブルース、マリナ、ラ・コス、カントン、カウターノ・ウェーローと共に活動。ジル・バティストに1988年から参演、「永遠の神」の翻訳に始まり、ブラジル国内とアメリカ、ヨーロッパ、ツアーセンターでも好評を博している。



アリ・ヂアス(バーカッション)
ARY DIAS (percussão)

サルヴァドール出身。16歳。1980年、バーバード音楽院の音楽系の上級クラスで最初の勉強を開始。近年インストゥルメンタル・グループ、「ア・パンダ・ド・コンニエイロ」を結成。一方で、同大学の各教務課として有名なカルマー・スマッティに師事し、彼と共に「ミクロトンズ」の研究に従事する。バーバード音楽院受講翌年、その後先から世界まで各地の人気グループ「ア・コル・ド・ソニ」のメンバーとして日本のレコードに参演。同グループでヨーロッパ、アメリカ、カナダなどを巡回。またバーバードのカーニバルには欠かせない「トリオ・エレトリオ」の元祖、「ドードー・オスマル」のグループにもドラムスで参加している。



ジョルジニョ・ゴメス(ドラムス)
JORGINHO GOMES (bateria)

サルヴァドール出身。15歳。兄妹でプロとしての活動を開始。ジル・ペルト、ジル・カエターノ・ウェーロー、ガル・コスタ、エラズモ・カルロス、ペタニア、コス、ベイビー・コシス、モイズ・カシオロ、サンドラ・チ・サウ、パラジル、ポヒューラ世界の大物アーティストたちと共に活動。16歳から18歳までオス、ノーヴェス、バイアーノス(ライス・モレラ、ペタニア、コスらが参加していた)のメンバーとして、そして19歳から20歳までヨーロッパ、リオのメンバーとして、演奏だけではなく作曲や編曲でも活躍した。彼はまた、ドムズ以外にも多くのアーティスト、バンドメン、ベース、バーカッション等こなす才人である。今回同行したペニスト、チヂ・ゴメスは彼の娘。



チヂ・ゴメス(ベース)
DIDI GOMES (baixo)

サルヴァドール出身。16歳。1980年オス、ノーヴェス、バイアーノスのペニストとしてプロデビュー。同年ペタニア・コシエロとペタニア・ゴメスのクロ・アルバに参加。同年スヌのシントル・フットスタイルで世界の相撲舞台に立った。翌年10月1日で、世界的スターを多数ゲストに迎えて行なわれた「ロック・イン・リオ」に出演。パラジルのマスコロニにイギリスのクリス・スティーヴィー・オーラーと共にその最もっとも激闘らしいペニストとして紹介された。さらに、同年ア・コル・ド・ソニとレコーディングした曲がテレビドラマに採用された。同年、ペタニア・リオ・ド・ソニと活動とともに、パラジル住民はもとよりアメリカ、ヨーロッパ・ツアーセンターに参演している。

STAFF

プロデューサー：木田健司(ラティーナ)
スタッフ・ディレクター：吉澤義三(ラティーナ)
舞台監修：坂元洋一(平成舞臺工房)
PA・プランナー：吉澤義一(ads)
PAエキサー：井上幸一(ads)

美術制作チーフ：坂元洋一(平成舞臺工房)
美術：岡村亮春(平成舞臺工房)
音響：エドゥアルド・フジアン・岡村亮(ラティーナ)
照明・プランナー：小林光司郎(共立)
脚本：坂元洋一(共立)
表紙：カステージ写真：舞臺、野

BAHIA MEMO

ブラジルの旧都サルヴァドール

リオデジャネイロから100km、ブラジルの東北部に位置するバイア州の州都サルヴァドールは、人口約150万を数えるブラジル第5の都市だ。北に行くほど暑くなる南半球のこと、常夏の地バイアでは1年を通して平均気温が25度~30度、13度を下ることは滅多にないという。

そんなサルヴァドールは、16世紀の初頭にボルトガル人によってブラジルが「発見」されて以来約200年にわたってブラジルの首都としての機能を果たした。総督府が置かれた1549年からリオに遷都される1763年まで行政・軍事、そして経済の中心地であったこの街は、いたるところにヨーロッパ文化の面影を残している。田舎町の路地を覆う石畳、風情あふれる歴史的建造物の數々、そしてこの街の名物のひとつである酸漬金。市内だけで76を数える。

黒人奴隸貿易

この植民地の首府は、1530年代以降の黒人奴隸貿易の中心地でもあった。砂糖産業が勃興した当初、ボルトガル人は先住民族であるインディオたちを奴隸化してその労働力をとしたが、その後の激減とともにアフリカ大陸の黒人たちを奴隸として輸入することになる。バントゥー族系やヨーパ族系を中心にして、1888年の反奴隸解放までにブラジルに連れてこられた黒人の数は350万人とも1000万人ともいわれている。17世紀後半から砂糖産業は沈没

し始めたが、それに取って代わったのが大量的な紙幣の発見とともにもう1度の発展だった。そこでもまた大量の労働力が必要となった。そういった双葉貿易の中心になったのが、バイアの港だったのだ。

混血文化の宝庫バイア

だから、バイアは「混血の国」、ブラジルの中にもあって特に黒人文化の影響を色濃く残した地なのである。実際、サルヴァドールの街を歩くとき、行き交う人々の顔がブラジルの他の都市に比べてより「黒い」ことは直感的に感じ取れるであろう。またここには、アフロ・ルーフの音楽やカンドンブレと呼ばれる宗教などのアフリカ文化の保存・発展を目的とした文化団体がいくつも存在し、現在も活発な活動を展開している。

そんなバイアの豊かな土壌。そこでは現在までにすばらしい混血文化が実を結んできた。また、この地方は種々な分野での優れたアーティストたちを輩出していることでも有名高い。ブラジルの国民的大作家ジョルジ・アマードをはじめとして、画家のカリベ、大作曲家リカルド・カイム、ボサノヴァのジョン・ジルベルなどなど枚挙にいとまがない。そして現在でも、アフリカのカリブ海を見渡したグローバルな音楽を次々と発信し続けているのである。最近では全世界的ヒットとなつた方の「ランバーダ」の発祥の地として注目を集めだが、その真偽のほどはともかくとして、騒ぎたてられるだけの「何か」がバイアに秘めら

れていることだけは確かだ。

トロピカルな空気と色彩

サルヴァドールの街には、トロピカルな空気と色彩が溢れている。市の中心部は、高台の部分と海に通じる低地の部分に分かれています。その高低差は約30メートル余り。そこを人々がエレベーターかケーブルカーを利用して行き来するという、ちょっと変わった地形なのだが、その高台から眺める海の青いことが、ちょっとくすぐんだこの街はバイアならではなのだ。ペロリニョと呼ばれるその昔貴族市場だった店場では、上半身裸の黒人たちが「カボチャ」と呼ばれる、横断枝を構成した踊りを踊っている。エレベーターで下町へとおりてみると、そこは色とりどりの野菜や魚、そして種々な民芸品が所せましと並ぶ市場。その躍躍の元気な顔に見合って、どこからともなくアカラジューを揚げる匂いが漂ってくる。アカラジューとはかの地特有の料理。デンマークと呼ばれるヤシの実から取った油で揚げる食べ物だ。バイア料理には、このデンマーク油やココナツ・ミルクなどを使ったものが多い。街角のいたるところでことういった料理を作りながら売っているのがバイアーナと呼ばれる純白のドレスに着を包んだ黒人女性たちだ。彼女たちは「本当に自分たちに似合う色」を知っている。

照りつける太陽の下で、歴史の重みとエキサイティングな現在が交錯する街、それがジルの故郷サルヴァドールなのだ。





南北に長く、南米でもっとも多様な風景と文化を誇るチリ！その豊かなフルクローザーの歌々がドラマのように展開する、世界的にも評価の高いステージ！

チリ国立民族舞踊団

Ballet Folklórico Nacional de Chile

北のアンデス高原のシーケの演劇と踊りから、太平洋上の島の島バスクア（イースター）島のハワイアンに伝わるダンス。中央部のチエカという少数民族たちのダンスなど、文字通り「多色」文化を抱む40歳の躍動力あふれたメンバーが歌い、演劇し、踊るという楽しみなステージ。

11月～12月全国21回の公演決定！



世界でも最高級の評価を受けているキューバの国立バレエ団が初めて日本に！

キューバ国立バレエ団

Ballet Nacional de Cuba

昨年のスペイン公演の成功以来、世界的規模で躍進している元祖芭蕾の「ドン・キホーテ」のほか、日本シラマーナ、アントニオ・アロンソの実験的踊りも実現するという。まさに世纪のスター！観客70名での公演！

’91年1月～2月全国約15回の公演決定！



現在老練される最高のスタッフが創るアルゼンチン・タンゴの頂點のステージ！

ネストル・マルコーニ・タンゴ・オルケスタ

Néstor Marconi Tango Orquesta

世界的なタンゴ・ブームの偉大なる立て役者、バンドネオンのマルコーニは、今やステージに特異によく、世界をまたぐ活躍する巨匠。彼が運びだしたタンゴ界最高のミュージシャンによるオール・スター楽団とエシリカ・ドウマス、マリア・ホセというトップ歌手、さらにも名の隠れを加えた正に夢のタンゴ・ステージ！

’91年1月～3月全国約55回公演決定！



●お問い合わせ先
吉(371)5102
財団法人民主主義基金

Titan Body

以上は、「NASA版」の「TITAN」の構成図に詳しく見てみたかったのですが、結論を述べさせていただきますと、全く正確でないものばかりでした。これは、NASA版では、すべてがTITANエイドで構成されるべきであることを前提としているからです。このままではさうした中のデータソースが、他の機器によっても利用可能になってしまって、TITAN版では、その機能が失われてしまうのです。そこで、TITAN版では、データソースをTITAN版専用のものにして、他の機器による利用を防ぐようにしてあります。そのため、データソースは、TITAN版専用のものとして扱われる形で実装されています。また、データソースは、TITAN版専用のものとして扱われる形で実装されています。そのため、データソースは、TITAN版専用のものとして扱われる形で実装されています。



廣野高橋製造株式會社 〒100-7242 東京都千代田区麹町3-25 電話03-551-4111

STAMA

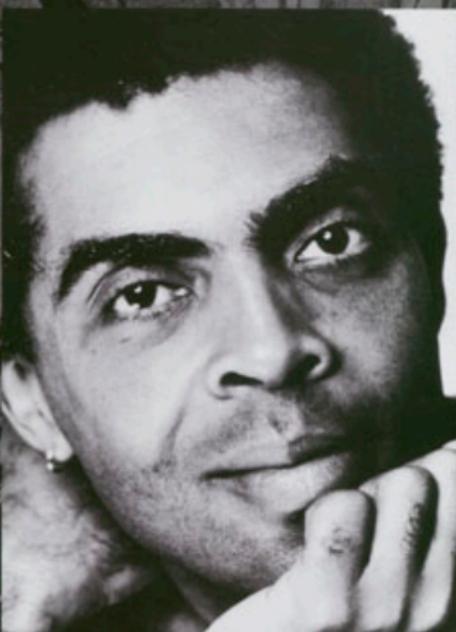
LATINA

ラティーナ 世界の音楽情報誌



音楽の宝庫
ブラジル、カリブ、アフリカ、アジア、USA、ヨーロッパ……
世界からのホットな最新音楽情報誌

**BRASIL, CARIBE,
AFRICA, ASIA.....**



GILBERTO GIL

BEST OF GILBERTO GIL

シリベルト・シリベルト・シリベルト・シリベルト

Digitized by srujanika@gmail.com

門的獨立での結果の比較は、アカルビンアルコール

ハーフスターの情を不動の心にした最新作「上への旅」で、

リサラフランチャード・アンド・カンパニーの「リサラフランチャード・アンド・カンパニー」

マジックテープ/マジックテープ

BEST OF
GILBERTOP

卷四



シリベルト・シリル/永遠の神

（映画）木道の桜「第一桜」 大庭の桜「桜の木」 桜の木の花「桜の花」
ボブ・マーリー「モーニング・ジ・ワールド」
●CD WMCIS-102 R2008年4月23日 HIKE発行

情熱直下、ブラジル。

美しい情熱の国、ブラジル。
太陽の光がさんさんと降り注ぐこの国の人々は、だれもが陽気に満ち、
訪れる人を魅了してしまいます。そんな素晴らしいブラジルへの旅には、

南米最大のエアライン、ヴァリグ・ブラジル航空をご利用ください。

東京-ブラジル週4便のヴァリグは、豪華なお食事と

心のこもったサービスが好評です。飛び立った時からブラジルムードが高まる

快適な空の旅をお楽しみください。しかも、ヴァリグならではのネットワークで、

南米各都市への接続も大変スムーズです。



「ヴァリグ・ブラジル航空」



VARIG
Brazilian Airlines

お問い合わせは

● 東京／予約(03)211-6751㈹ 貨物(211-2626㈹) ● 名古屋／(052)565-1641

● 大阪／(06)341-3571～2 ● 福岡／(092)714-7558 ● 横浜／(0988)67-3304

東京-ブラジル週4便

出発日：青葉山・赤堀口・赤堀口・土曜日

* 土曜日発は日本航空との共同運航便

本格の生ビール。



サッポロ(生)黒ラベルは、
世代をこえ、流行をこえて愛されつづけている生ビール。
名酵母M2が醸しだす深い味わいに、
いま、多くの人々から共感が集まっている。
いつまでも飽きのこない本格のうまさ。
味わいの生、サッポロ(生)黒ラベル。

サッポロ(生)黒ラベル

サッポロビール株式会社
●未成年者の飲酒は法律で禁じられています。



G I L B E R T O

G I L



Minas